

一の宮遺跡

平成21年度株式会社トキワ電機施設建設用地
造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書



2010年

株式会社 萩原製作所
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

序

箕輪町木下区一の宮は、町の西部山麓の裾、帶無川の南に位置し、東方には仙丈ヶ岳が望める自然豊かな所です。この地は歴史も古く、室町時代以前に創建されたといわれる木下南宮神社の旧跡で、地名の由来でもある「一の宮」が奉られています。また一帯は、戦前までは一面松林でしたが、戦中戦後の食料難の対策のために開拓事業が進められ、入植者たちの血のにじむ努力によって広大な農地へと変貌を遂げました。このような環境を背景とした中に、帶無川の右岸に沿つて一の宮遺跡があります。大正の頃より、地元の人々によって土器や石器が数多く採取されてはいましたが、遺跡の内容は不明でありました。

今回、株式会社トキワ電機伊那工場の施設増設による用地造成工事に先立って、町教育委員会が初めてこの遺跡の発掘調査を実施しました。また、調査中には多くの方々が見学に訪れ、遺跡の様子に触れていただいたことは、大変喜ばしいことでありました。調査の成果につきましては、本書の中で詳細に記してあります。本書が、広く活用いただくことで地域の歴史解明の一助となり、また多方面に文化財保護に役立つことを切に願うものであります。

今回の調査の実施にあたり、株式会社荻原製作所様には文化財保護に対するご理解と、多大なご支援をいただきました。本書の刊行をもちまして、あらためて感謝の意を表するものであります。最後に、調査から本書の刊行に至るまで、各方面でご指導ご協力をいただきました関係諸機関、並びに地域と調査関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

箕輪町教育委員会
教育長 小林通昭

例　　言

- 1 本書は、平成21年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪16,335番地1他に所在する、一の宮遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査及び整理作業等の一切の業務は、株式会社荻原製作所より委託を受けて、箕輪町教育委員会が実施した。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。
 - 遺物の洗浄・注記－大串久子　春日誠子　松崎仲子
 - 遺構図の整理・トレース－赤松　茂　井沢はずき　根橋とし子
 - 遺物の実測・拓本－赤松　茂　大串久子　井沢はずき　根橋とし子
 - 挿図作成－赤松　茂、井沢はずき
 - 写真撮影・図版作成－赤松　茂
- 4 本書の執筆・編集は、赤松　茂、井沢はずきが行った。
- 5 調査現場の空中写真撮影は、有限会社M2クリエーションに委託した。
- 6 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。
- 7 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

小平和夫／小林紀玄／桜井利雄／福島　永／木下区／一の宮常会／株式会社トキワ電機伊那工場／箕輪環境センター有限会社／箕輪町立箕輪西小学校／箕輪町土地開発公社／箕輪町歴史同好会

凡　　例

1 挿図

- ・挿図の縮尺は、各図ごとに表記（スケールを有するものも含む）した。
- ・遺物実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。
 - 土器実測図－1：4　　土器拓影図－1：3　　石器－1：3及び2：3
 - ・土器実測図の土器断面の接合状況は、観察できるもののみ表示している。
 - ・土器実測図のスクリーントーンによる表示は、以下のものを表している。

 …黒色処理  …灰釉陶器断面

- ・遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表している。

 …礫断面  …焼土 ● …土器

2 土層及び遺物観察

- ・土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。
- ・出土土器及び石器観察表の法量は、現存する数値は「()」で、「-」は計測不能を表している。

3 写真図版

- ・各写真的数字は、挿図における遺物番号を表している。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査概要と体制	2
第3節 調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地形と地質	3
第2節 歴史環境	4
第3章 発掘調査の結果	6
第1節 調査の方法	6
第2節 土層堆積状況	6
第3節 造構と遺物	8
1 堅穴住居址	
2 土 坑	
3 造構外出土遺物	
第4章 総 括	19
図 版	
報告書抄録	

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

一の宮遺跡は、箕輪町の北西部木下区一の宮地籍に所在し、西部山麓より東方に流れる帶無川の右岸の縁に立地している。一帯は、戦後本格的に行われた開拓により広大な農地へと変貌した。その際、土器や石器が多く出土し、地元では遺跡地としての認知はあったが、その後平成6～8年度に箕輪町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査によって、埋蔵文化財包蔵地として周知されることとなった。

今回、本遺跡内に周知以前より創業する株式会社荻原製作所のグループ企業である株式会社トキワ電機が、社屋の東部に隣接した4,362m²を用地とする施設増設を計画している旨、用地の取得に協力した箕輪町土地開発公社から、平成21年1月に連絡を受けた。同年2月、同社より文化財保護法第93条の届出が提出され、係る埋蔵文化財の保護について協議を行った結果、社員駐車場の1,638m²については、文化財の有無を確認するため試掘調査を実施し、残る2,724m²は既存施設の建設段階で文化財が消滅している可能性があるため、構造物撤去時に立会い調査を行なうこととした。

試掘調査の結果、遺構と遺物の出土が確認されたため、改めて保護協議を行ない、遺構の確認されたおよそ600m²を対象とした発掘調査による記録保存を図ることとなった。調査は、町教育委員会が株式会社荻原製作所から一切の業務を委託され実施することとなった。



第1図 調査位置図 (1:50,000)

第2節 調査概要と体制

- 1 遺跡名 一の宮遺跡（いちのみやいせき）
2 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪16,335番地1他
3 調査期間 平成21年4月6日～21年12月15日（委託契約期間4月28日～22年3月26日）
4 調査団
調査団長 小林通昭
調査担当者 赤松 茂
調査員 根橋とし子 岡田和弘
調査団員 井沢はずき 伊藤輝彦 今間貞夫 大串 進 大串久子 小川陽三
春日誠子 唐澤清光 川合佐一 平澤 洋 平澤真奈美 堀川利平
松崎仲子 向山英人（50音順）
5 事務局
教育長 小林通昭
生涯学習課長 唐澤清志（箕輪町郷土博物館長 21年9月30日まで）
郷土博物館長 中村文好（21年10月1日より）
文化財係主幹 赤松 茂（同館 学芸員）
同 主幹 有賀一治（同館 学芸員）
同 主幹 柴 秀毅（同館 学芸員）
臨時職員 中村孝子



第3節 調査日誌

- 4月7日～9日 4本のトレンチを設定し、試掘調査実施。
4月28日 機材搬入等準備。
4月30日～5月8日 重機にて表土剥ぎ
5月11～15日 遺構上面確認作業。副町長、現場視察。1・2号住居址確認。
5月18～21日 1・2号住居址、1号土坑の掘り下げ、土層断面測量、写真撮影。
5月25・26日 1・2号住居址全堀。2～5号土坑掘り下げ、土層断面測量、写真撮影。
5月27日 箕輪西小学校6年生及び職員、トキワ電機社員現地見学。箕輪中学2年生職場体験。
6月2日 現地見学会。ラジコンヘリによる航空写真撮影。
6月3日 現地見学会。前日と含め、約100名が見学に訪れる。
6月4・8日 1・2号住居址平面測量及び遺物の取り上げ。3号住居址確認。
6月9～12日 3号住居址掘り下げ、土層断面測量、写真撮影。
6月15・16日 6号土坑掘り下げ、土層断面測量、写真撮影。3号住居址内集石平面測量及び取り上げ。
6月29日～7月6日 遺構及び調査区全体測量。
7月7日 重機による埋め戻し、機材の撤収。
11月28日・12月15日 既存構造物撤去に伴う立会い調査実施。

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスにはさまれた、南北70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。盆地は、天竜川の低地から両アルプスの山頂に至って、大起伏地帯となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10km幅にそれが集中する、極めて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

箕輪町を含む上伊那北部の竜西（天竜川の略称で、東側は「竜東」と呼ぶ）地域では、天竜川の各支流から押し出された土石流が重なり合い、現在の複合扇状地が形成された。竜西扇状地は、伊那谷の中でも最も広いが、これは、上伊那南部の扇状地による土砂が天竜川をせき止めたことと、中央アルプスと交差する境縄断層により、中央アルプスの主要部が大きく西へ移動し、同様に経ヶ岳山麓の活断層帯も西へ崩れたため平な盆地が造られたという二つの理由により、両アルプスから搬出された砂や礫が盆地内に蓄えられたためとされている。その後、扇状地が浸食され、田切地形と呼ばれる深い谷状の特徴的な地形が生れた。箕輪町でも天竜川に注ぐ桑沢、北の沢、深沢、帶無などの各中小河川の扇状地扇端部にそれを観ることができる。

次に、箕輪町のもう一つの特徴的な地形景観である段丘に目を向けると、竜西地区では、天竜川より2ないし3列からなる、階段状の崖として確認できる。伊那谷各地でみられるこの段丘崖は、以前は天



上空より遺跡地を望む

竜川が形成した河岸段丘と考えられていたが、現在では活断層の断層運動によって造りだされた断層崖ということが各地で確認されている。箕輪町でも、局地的な地質調査が進めば、この段丘がどのように形成されたかわかるであろう。一方竜東地区では、唯一沢川の造りだした扇状地の南側だけが平坦な地形である。ほかの地域は、山が近いこともあり、変化に富んだ地形を造り上げている。特に最南端の福与地区では、天竜川に流れ込む中小河川が、小規模な扇状地を掘り込んだ結果、丘陵地形が配列し、地形変化を更に複雑にしている。しかしながら、現在では構造改善が進み、そういった地形の複雑な変化は、古い写真や地図で確認できるだけという場合が多く、元の地形を推測するのは難しくなってきている。地形と同じように竜東と竜西では地質の面に置いても非対照的で、基盤岩の質も異なる。竜東側では、基盤岩を覆っている被覆層は、比較的浅く、断片的であるため、支流の他に沿いには基盤岩が広く露出し、天竜川まで続いている。竜西側では、竜東に比べ被覆層が厚いため、基盤岩の露出は少ない。また、御岳テフラの終息期以後も、各支流より礫の押し出しが続き、後氷期の黒ボク土までを含む土壤と砂礫が混合して、扇状地の地形が続いたとされる。

今後箕輪町においても、遺跡が立地する環境を理解するために更に詳しい地質調査が必要となるであろう。

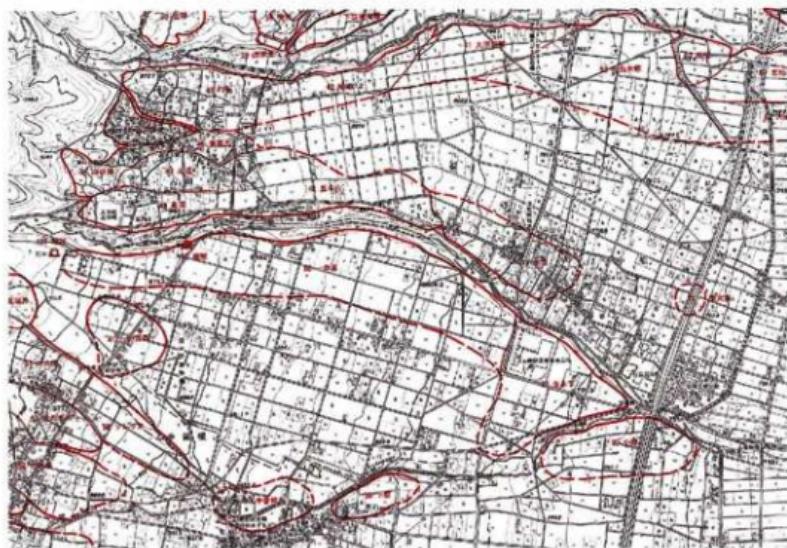
第2節 歴史環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など水源に恵まれており、先史より人が暮らしやすい格好の場が多い。町内には、先人たちが残した足跡ともいいくべき多くの遺跡が残されており、平成6～8年度に実施した箕輪町遺跡詳細布調査では、包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯と言える。

今回調査対象となった本遺跡を含む箕輪町西部地域には、縄文時代から中・近世にかけての遺跡を中心に、地形的な特徴によって分布している。本遺跡のように中小河川の沿岸部を帶状に広がる遺跡群と、山裾（扇頂部）に点在する遺跡群とに分けられるが、いずれも水源に隣接して分布する傾向が見られる。

帯無川右岸に位置する一の宮遺跡(80)は、これまで大正期に縄文土器や石器、土師器が発見された報告（鳥居龍藏 1926『先史及原始時代の上伊那』）があり、また戦後の開墾時においても同様の遺物が採取されている。平成8年の立会い調査では、縄文時代中期後葉と平安時代初頭の竪穴住居址を確認している。これより西方に位置する並木下遺跡(82)での発掘調査では、縄文時代中期後葉の竪穴住居址と集石遺構が確認されている。また、南方に位置する樅の木沢左岸の中曾根北遺跡(57)での調査では、平安時代と思われる掘立柱建物址のほか、縄文時代中期の土器片や打製石斧等の石器、弥生時代後期の土器片、平安時代の須恵器や灰釉陶器片が出土している。なお、大久保遺跡(51)では、町内でも事例が少ない旧石器時代所産と思われる槍先型尖頭器1点が採取されている。

帯無川左岸地域では、本遺跡の対岸に位置する五斗山遺跡(46)での発掘調査で、縄文時代中期初頭の竪穴住居址と平安時代と思われる掘立柱建物址が確認された。また隣接する幸道遺跡(47)遺跡では、縄文時代中期中葉の装飾把手付深鉢や焼町式の深鉢が、ほぼ完形で個人宅敷地より既出している。これより北方の深沢川右岸に位置する円仏遺跡(43)の発掘調査では、平安時代(10世紀)の竪穴住居址等の集落跡が確認されている。



第2図 周辺遺跡分布図 (1:20,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代						立地	塘口	備考
			旧	西	弥	古	秦	平			
80	二の糞	木下	○	○	○	○	○	○	崩頂～崩尖	畠	
42	丸崎	上吉田	○			○	○		崩尖	畠	
43	円仏	上吉田	○			○	○	○	崩頂～崩尖	宅地・畠	平成14年調査
44	西久森	上吉田	○	○	○	○	○	○	崩頂	宅地・畠	
45	五反山	上吉田	○			○	○	○	崩頂	宅地・畠・田	平成12・21年調査
46	笠置北	上吉田	○			○	○	○	崩頂～崩尖	宅地・畠	
47	幸遺	上吉田	○	○	○	○	○	○	崩頂～崩尖	宅地・田	
48	南原	上吉田	○	○	○	○	○	○	崩頂～崩尖	宅地・田	
49	山の田	上吉田	○			○	○	○	崩頂	畠・田	
51	大久曲	富田	○	○		○	○	○	崩頂	宅地・田・林	
52	ソレツカ	富田	○			○			崩頂～崩尖	畠	
53	船の木段	宮田	○			○			崩頂	宅地・畠・山林	
54	下坂場	富田	○	○	○	○	○	○	崩頂	宅地・畠	
57	中曾根北	中曾根	○						崩尖	宅地・畠	昭和54年調査
58	下坂	中曾根				○			崩尖	宅地・畠	
59	松島大塚	松島	○		○	○			崩尖	畠・亂地	平成6・10年調査
60	銀雀	松島	○		○	○			崩尖	畠	昭和48年調査
78	南大原	松島	○						崩尖	畠	
79	吊頭	中坂	○			○			崩尖	宅地・畠	
82	井木下	木下	○			○			崩尖	宅地・畠	昭和48年調査
83	小原	木下	○			○			崩尖	畠	
190	御殿古墳	木下			○				山間	林	別称一の宮古墳
192	新宿古墳	木下			○				崩尖	林	西城

第3章 発掘調査の結果

第1節 調査方法

今回の調査に際し、遺構の有無と内容確認するため、用地内で4本のトレンチを掘削による試掘調査を実施している。その結果、トレンチ4の北端と中央部において遺構が確認されたため、遺構広がりが予測されるおよそ600m²を本発掘調査の対象とした。

作業の手順としては、まず大型重機により遺構確認層直上までの表土を除去し、続いて人力による遺構検出作業を進め、検出した各遺構の掘り下げを行った。各遺構より出土した遺物は、各遺構の覆土中の土器片は層位ごとに取り上げ、床面直上の遺物は記録後に番号を付けて取り上げた。

測量による記録作業は、遺構平面図はトランシットによる測点記録し、遺物出土状況は簡易遺り方測量で1:10縮尺に作図し、土層断面図は1:10または1:20の縮尺で作図した。測量作業における座標及び方位は、トータルステーションを使用して調査地全域を世界側地系の基準線を重ねて記録した。また標高の基準点は、調査区北東部の境界柱に任意にベンチマーク(836.975m)を設定した。写真による記録は、一眼レフデジタルカメラ撮影と、35mm一眼レフカメラによるモノクロ及びカラーリバーサルフィルム撮影を行なった。また、必要に応じ6×7カメラによるカラーリバーサルフィルム撮影も行なっている。なお、本書に掲載した遺物写真は、一眼レフデジタルカメラにて撮影した。

第2節 土層堆積状況（第3図）

調査地の土層堆積状況は、表層に駐車場の人为的に碎石が10cmの厚みで敷かれていたが、基本的に旧畑の耕作土（I層）、整地による人为的堆積土（II層）、黒褐色の自然堆積土（III層）、オリーブ褐色の自然堆積層（IV層）、黄褐色のローム（テフラ）層（V層）の5層に分けられた。遺構は、IV層確認面で検出し、V層まで掘り込まれる。また当該地は、以前養豚の畜舎であったこともあり、調査地内のはば全域に渡り搅乱坑が点在し、埋め立てられた2本の溝が部分的に遺構を切っていた。各層の詳細は以下のとおりである。

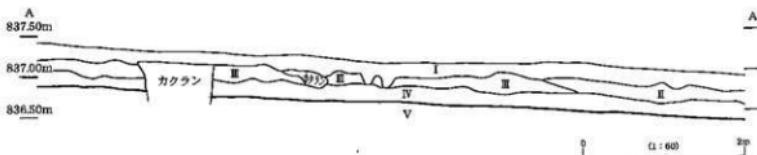
第I層 7.5YR4/4（褐色） 旧畑の耕作土層。粘性・締りは共に弱い。

第II層 10YR2/2（黒褐色） ローム粒子が30%混在する人为的堆積層。粘性はやや強く、締りは強い。

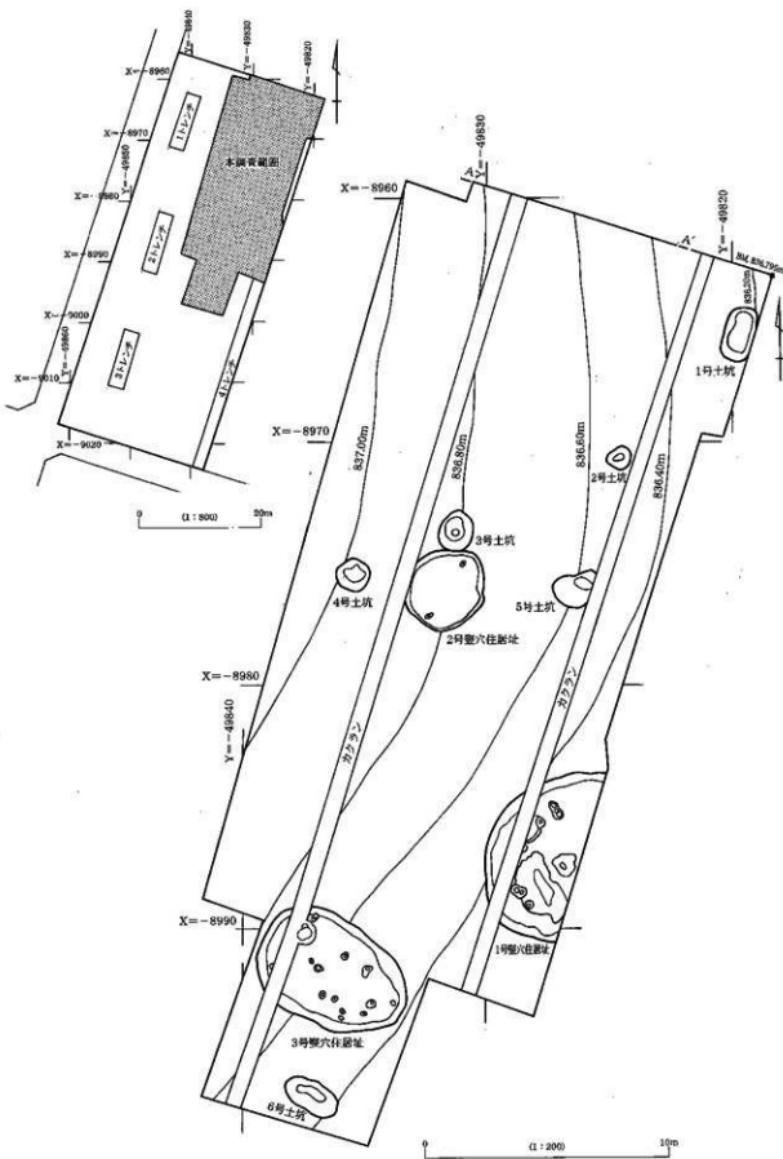
第III層 7.5YR3/2（黒褐色） ローム粒子を1%含む黑色シルト層。粘性は強く、締りはやや強い。

第IV層 2.5Y4/4（オリーブ褐色） 遺構確認層。ローム粒子を20%含む。粘性・締りは共にやや強い。

第V層 2.5Y5/6（黄褐色） ローム（テフラ）層。粘性・締りは共に強い。



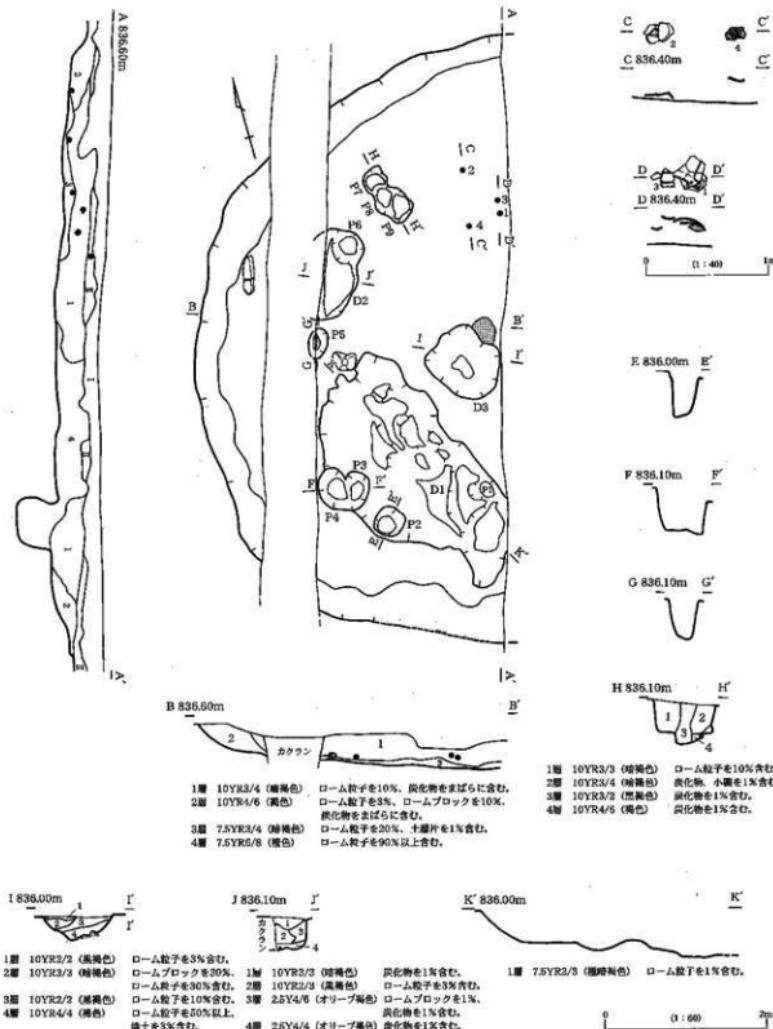
第3図 土層断面図



第4図 調査区設定図、全体図

第3節 遺構と遺物

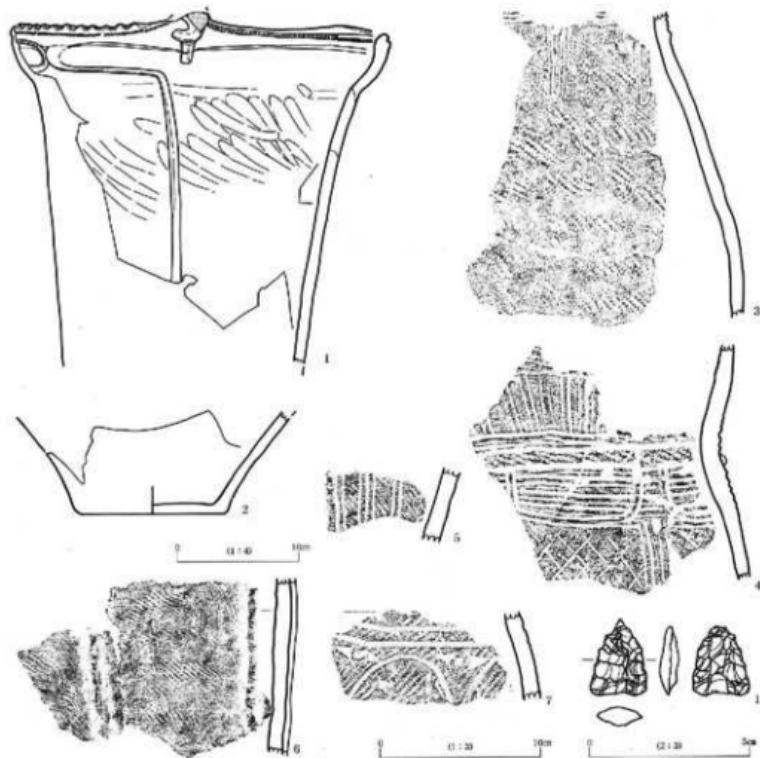
1 穴住居址



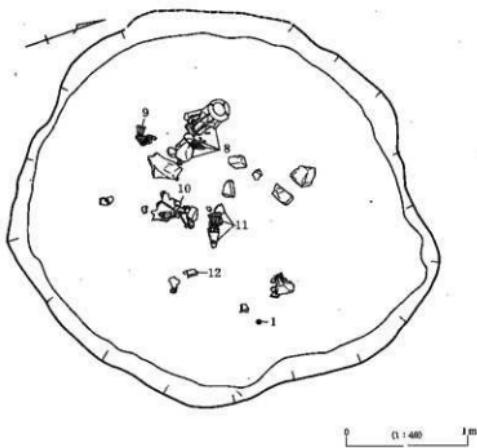
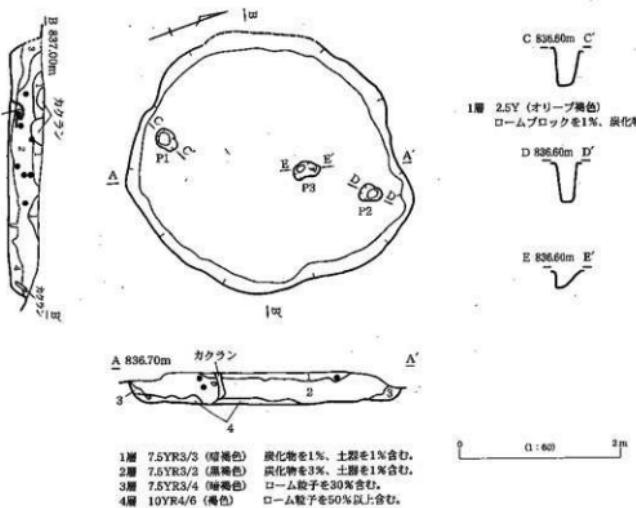
第5図 1号竪穴住居址実測図

1号堅穴住居址（第5図）

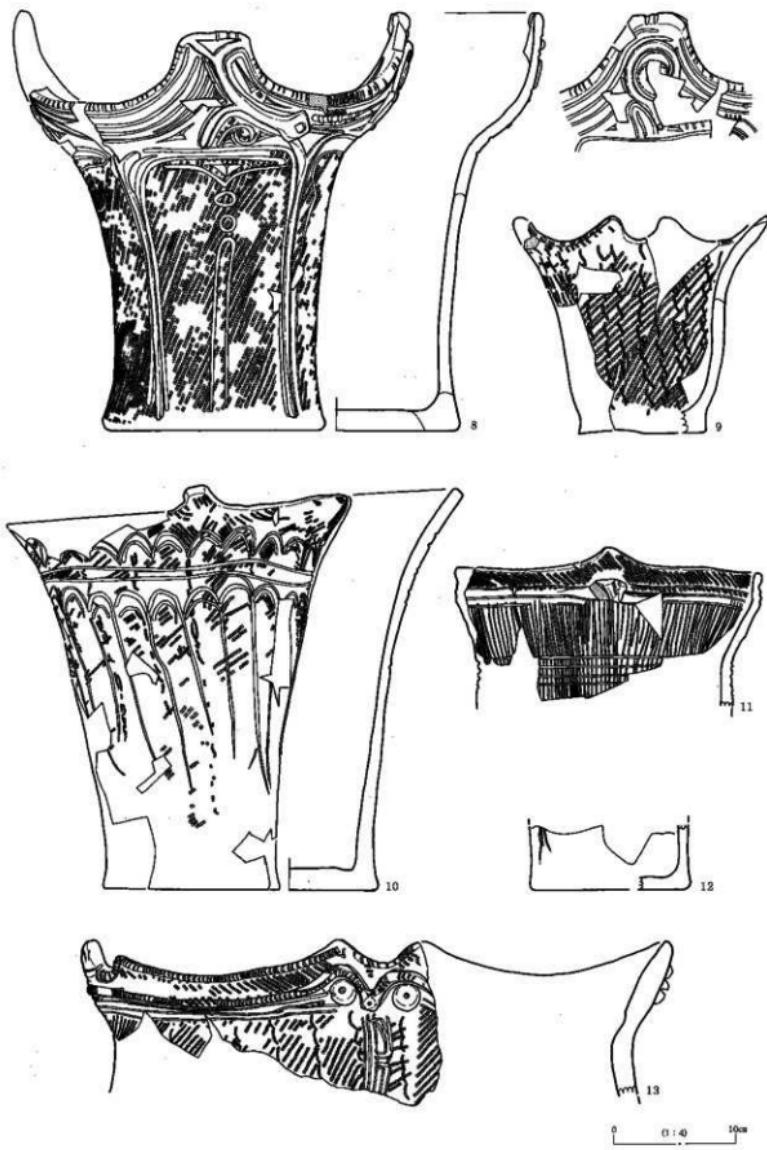
位置：調査区の南東部、世界測地系X=-8987.00、Y=-49826.10に位置する。主軸方向：不明。規模・形状：長軸7.2m、単軸(3.7)mを測り、円形を呈するものと思われる。本址の東部は調査区外に埋没するため検出できなかった。また西部は、後世の搅乱溝により切られる。覆土：4分層され、全体的にローム粒子やブロック、炭化物が含まれる。また4層は、V層とほぼ同じ黄褐色土（ローム）で、廃絶後にD1が構築された際に排出された残土と思われる。床面・壁：ほぼ全域に渡り堅固に叩き締められている。壁残高は29cm～51cm余りを測り、立ち上がりは緩やかな傾斜を有する。また、壁下の周溝はない。炉：本址のほぼ中央の床面に位置する地床炉で、火熱を受けて赤褐色に変色している。柱穴：P1～9の9穴を確認する。P3とP4、P7～P9のように、柱穴が切り合うことから、建替えによる柱の移動が想定される。その他の施設：3基の土坑状の掘り込み（D1～3）が確認された。いずれも柱穴や炉を切るもので、本址に伴うものではない。遺物（第6図）：比較的出土量は少ない。また、炉の北方床面上直上に、器形の整った深鉢（1・3・4）、浅鉢（2）が出土している。石器は、石鏃1点（1）が



第6図 1号堅穴住居址出土土器・石器実測図、土器拓影図



第7図 2号竖穴住居址実測図、遺物出土状況図

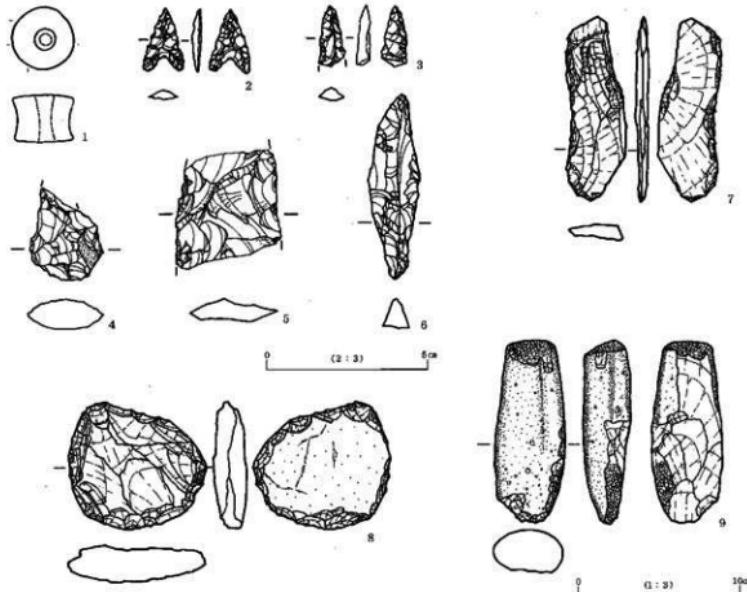


第8図 2号窓穴住居址出土土器実測図

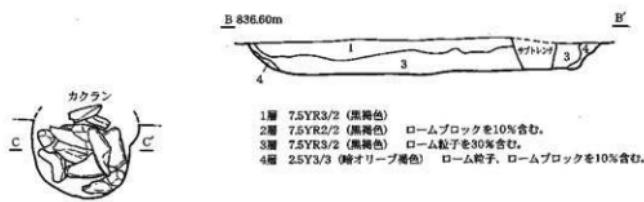
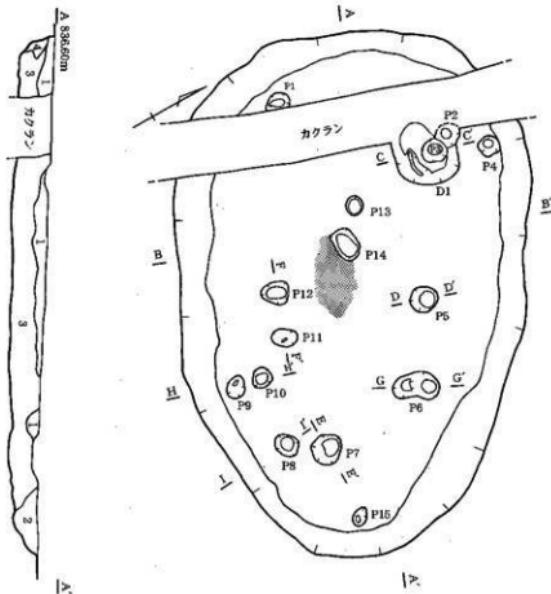
が出土している。各遺物の特徴は、別表を参照されたい。時期：縄文時代中期初頭と考える。

2号竪穴住居址（第7図）

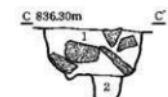
位置：調査区のほぼ中央部、世界測地系X=-8976.00, Y=-49831.70に位置する。主軸方向：不明。規模・形状：3.5×3.1mを測り、円形を呈する。また本址の西部壁は、後世の擾乱溝により切られる。覆土：4分層される。全体的にローム粒子やブロック、炭化物が含まれる。主に、床面上より拳大から人頭大の礫が多く出土するが、焼成は受けていない。床面・壁：全城に渡り、堅固に叩き締められている。壁残高は36cm～41cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下の周溝はない。炉：火焼部等の痕跡は確認されなかった。柱穴：P1・2の2穴を確認する。その他の施設：ほぼ中央に1基のピット状（P3）の小穴が確認されたが、掘り込みが不整形で柱穴と分別した。遺物（第8図）：覆土中に土器片及び黒曜石片が多く含まれ、規模が小型にもかかわらず、他の住居址に比べ出土量はきわめて多い。土器の多く中・小型の深鉢で、礫とともに本址の中央部の床面上に散在した状況で出土しており、個体として押し潰れた状態のもの（8・9）、近接した範囲で散るもの（9・11）が確認された。特出するものとしては、抽象化された人面ないし獸面文様を施す大型の深鉢（13）がみられる。石器は、石鏃2点（2・3）、加工根のある剥片石器1点（4）、スクレーパー1点（5）、石錐1点（6）、横刃型石器2点（7・8）、磨製石斧1点（9）が出土している。また、土製品として耳栓1点（1）が出土している。各遺物の特徴は、別表を参照されたい。時期：縄文時代中期初頭と考える。



第9図 2号竪穴住居址出土土製品・石器実測図



- 1層 7.5YR3/2 (黒褐色)
2層 7.5YR2/2 (黒褐色) ロームブロックを10%含む。
3層 7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を30%含む。
4層 2.5YR3/3 (暗オリーブ褐色) ローム粒子、ロームブロックを10%含む。



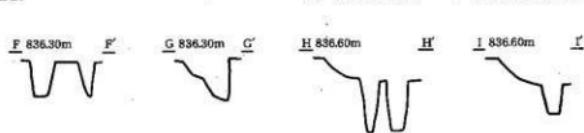
- 1層 10YR3/4 (暗褐色)
ローム粒子を10%含む。
2層 10YR3/3 (暗褐色) 小礫を含む。



- 1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む。
2層 10YR4/6 (褐色) ローム粒子を50%以上含む。

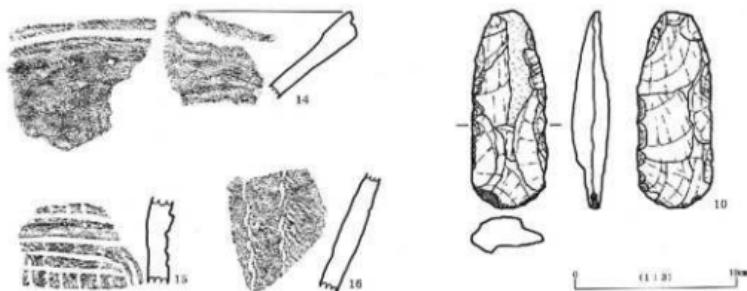


- 1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む。
2層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を20%含む。
3層 10YR4/6 (褐色) ローム粒子を50%以上含む。



0 (1 : 60) 1m

第10図 3号堅穴住居址実測図



第11図 3号竖穴住居址出土土器拓影図・石器実測図

3号竖穴住居址 (第10図)

位置: 調査区の南部、世界測地系 X=-8991.9, Y=-49836.4 に位置する。主軸方向: N-62° -W。
規模・形状: 6.4×4.2m を測り、楕円形を呈する。また本址の西部に、後世の擾乱溝により切られる。覆土: 4 分層され、全体的にローム粒子やブロックが含まれる。床面・壁: ほぼ全城に渡り、堅固に叩き締められている。壁残高は 33cm ~ 44cm を測り、ほぼ垂直に立ち上がるが、部分的に緩やかな傾斜となる。また、壁下の周溝はない。炉: 本址のほぼ中央の床面に位置する地床炉で、1.2×0.5m の範囲で火熱を受けて赤褐色に変色している。また、P14 に一部を切られる。柱穴: P1 ~ 12 の 12 穴を確認する。直径 30 ~ 40cm の円形で、45 ~ 58cm の深さを測る。P2 と P3 のように切りあうものや、P9 ~ P10 のように隣接するものなど、建替えによる柱の移動が想定される。その他の施設: 3 基のビット状 (P12~14) の用途不明の小穴が確認されたが、掘り込みが浅く柱穴と分別した。また、P2・3 を切り、後世の溝に切られるが、直径 85cm で深さが 38cm を測る、内部に砂岩や粘板岩の人頭大の礫 12 個を含む集石土坑 (D1) を検出した。用途及び性格は不明で、本址廃絶後の単独構造と考える。遺物 (第11図): 出土量は極めて少ない。土器は、すべて小破片で、覆土中より結節繩文を施す等の浅鉢及び深鉢 (14~16) がみられる。石器は、黒曜石片及び打製石斧 (10) が出土している。時期: 繩文時代中期初頭と考える。

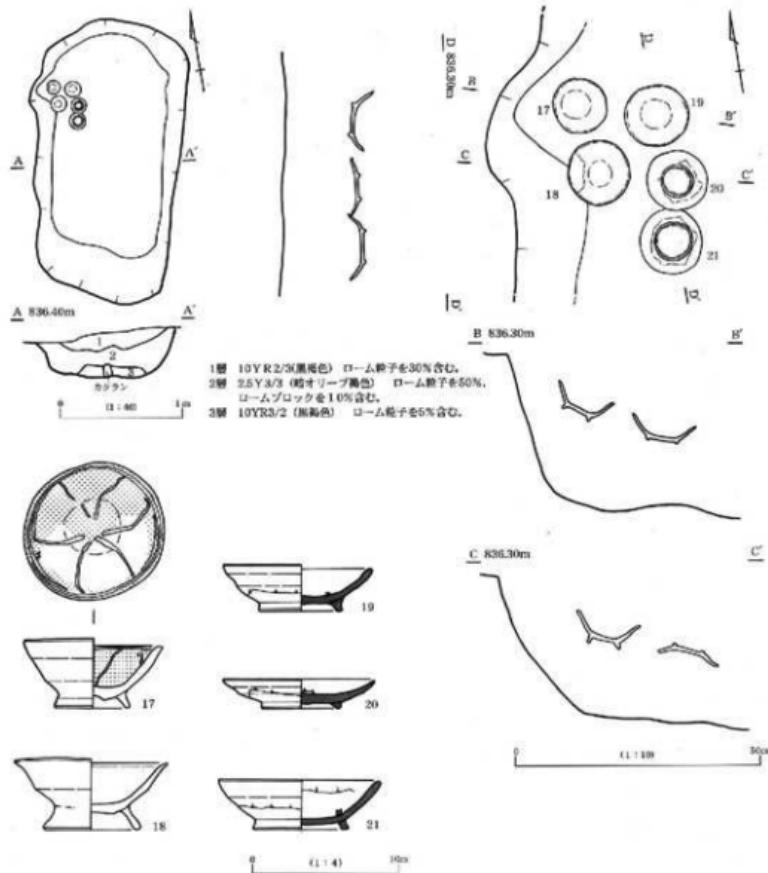
2 土坑

1号土坑 (第12図)

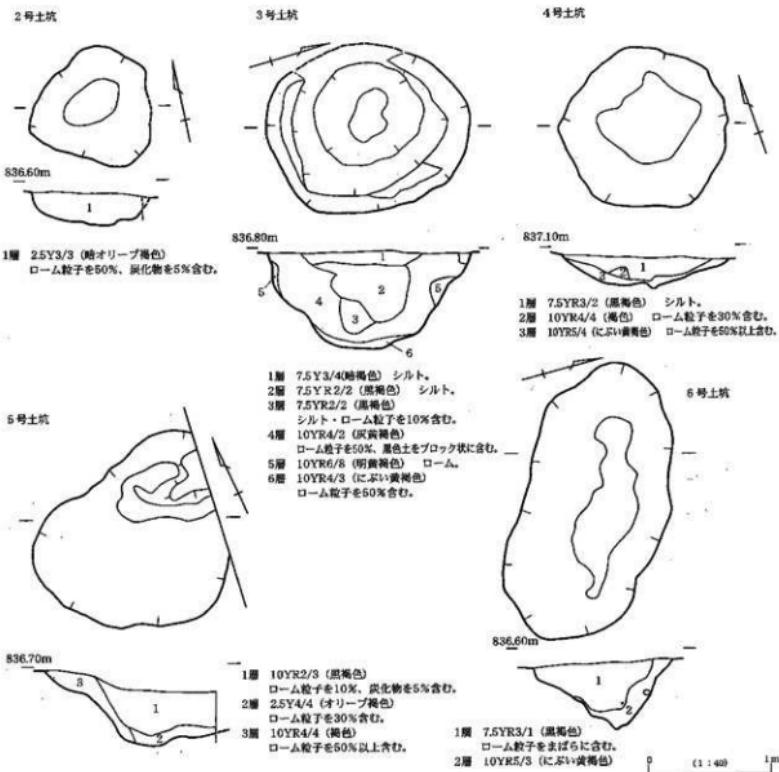
位置: 調査区の北東部、世界測地系 X=-8965.7, Y=-49819.6 に位置する。長軸方向: N-14° -E。
規模・形状: 長軸 232cm、短軸 115cm、深さ 40cm を測り、平面形は長方形を呈する。底面・壁: 底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土: 3 分層され、全体的にローム粒子やブロックが含まれる。
遺物: 本址の北西部の 2 層覆土中より、土師器の碗 2 点 (17・18)、灰釉陶器の碗 2 点 (19・21)、同皿 1 点 (20) が、まとまった状態で出土している。20 の皿と 21 の碗は逆位であったが、土師器と灰釉陶器はいずれも整然と列を形成し、30×45cm の長方形の枠に収まる。他に、混入品も含め遺物は出土していない。時期・性格: 出土遺物の分析から、平安時代 10 世紀末と考える。本址は、人骨こそ確認されなかったが、遺構の規模や形状、遺物の出土状況等の諸特徴から、土坑墓であると判断した。

2号土坑（第13図）

位置：調査区の北東部、世界測地系 X=-8970.7, Y=-49824.5 に位置する。規模・形状：長軸107cm、短軸92cm、深さ26cmを測り、平面形は楕円形を呈する。底面・壁：底面はほぼ平坦で、立ち上がりは緩やかな傾斜を有する。覆土：単層でローム粒子や炭化物が含まれる。遺物：なし。時期・性格：不明。



第12図 1号土坑実測図・出土土器実測図



第13図 土坑実測図

3号土坑（第13図）

位置：調査区の中央部、世界測地系X=-8973.8、Y=-49831.3に位置する。規模・形状：長軸165cm、短軸147cm、深さ80cmを測り、平面形は円形を呈する。底面・壁：底面は平坦で、立ち上がりは緩やかな傾斜を有し、2ないし3段に掘り込まれる。覆土：6分層され、ローム粒子含まれる。遺物：なし。時期・性格：不明。

4号土坑（第13図）

位置：調査区の西部、世界測地系X=-8975.4、Y=-49835.4に位置する。規模・形状：長軸138cm、短軸127cm、深さ24cmを測り、平面形は円形を呈する。底面・壁：底面は平坦で、立ち上がりは緩やかな傾斜を有する。覆土：3分層され、ローム粒子が含まれる。遺物：なし。時期・性格：不明。

5号土坑（第13図）

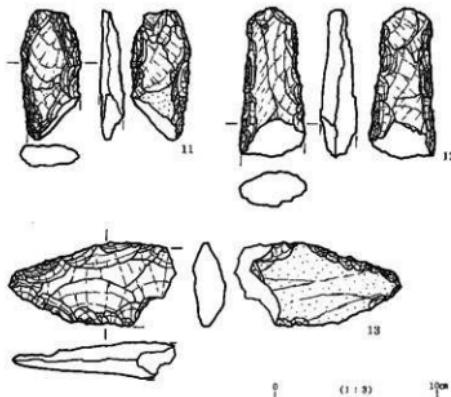
位置：調査区の北東部、世界測地系X=-8976.0、Y=-49826.2に位置する。規模・形状：長軸172cm、短軸129cm、深さ44cmを測り、平面形は不整円形を呈する。後世の溝に切られる。底面・壁：底面は凹凸で、立ち上がりは緩やかな傾斜を有する。覆土：3分層され、ローム粒子が含まれる。遺物：なし。時期・性格：不明。

6号土坑（第13図）

位置：調査区の南部、世界測地系X=-8997.0、Y=-49837.1に位置する。規模・形状：長軸235cm、短軸1cm、深さ55cmを測り、平面形は梢円形を呈する。底面・壁：底面は凹凸で範囲は狭く、立ち上がりは緩やかな傾斜を有する。覆土：2分層され、ローム粒子が少量含まれる。遺物：なし。時期・性格：不明。

3 遺構外出土遺物

遺構上面確認作業において、縄文中期初頭を主体とする土器片が出土している。他に、同中期後葉と、平安時代所産の土器類の甕及び壺や須恵器の甕の破片も少量みられる。石器は、黒曜石片と打製石斧（11・12）、横刃型石器（13）が出土している。



第14図 遺構外出土石器実測図

第2表 出土土器観察表

番号	遺構名	種類	器種	法量	残存度 (%)	文様（調整）	色調・胎土	焼成	備考
1	1号住	縄文土器	深鉢	(30.1) (24.9)	30	口縁に把手有り。把手を中心 に左右の口縫の形態が違う。	7.5YR4/4(褐) 雲母・石英・長石を含む	良好	
2		縄文土器	浅鉢	— (8.5)	10	無文	5YR4/6(赤褐) 雲母・白い砂粒を多く含む	良好	
3		縄文土器	深盤	—	破片	RL縄文を施す	10YR4/3(にぶい黄褐) 雲母・石英・長石を含む	良好	
4		縄文土器	深盤	—	破片	半載竹管状T工具による沈縫 文様	7.5YR4/4(褐) 雲母・石英・長石を多く含む	良好	
5		縄文土器	深盤	—	破片	窓下する沈縫とRL縄文を 施す	7.5YR4/6(褐) 白色砂粒を多く含む	良好	
6		縄文土器	深盤	—	破片	隆帯文とRL縄文を施す	7.5YR5/4 (にぶい褐) 雲母・石英・長石を多く含む	良好	

番号	遺構名	種類	器種	法量	残存度 (%)	文様(彫整)	色調・胎土	焼成	備考
7	1号住	縄文土器	深鉢	—	破片	沈線、三叉文、LR繩文で文様を施す。	5YR5/6(明赤褐色) 白い砂粒を含む	良好	
8		縄文土器	深鉢	31.5 34.4 34.4	90	直線状4本筋、口縁部の内側合口部には内凹の溝が彫り込まれる。斜面は下げるほど深くなる。	5YR4/6(赤) 白色の砂粒を多く含む	やや不良	
9		縄文土器	深鉢	(19.2) (10.6) (12.8)	40	波状輪鉢は底面。全体にLR繩文を施す。全表面下げる。	7.5YR4/6(褐色) 黒母・石英・石を含む	良好	
10	2号住	縄文土器	深鉢	(27.6) (12.6) (33.2)	50	口縁部に内凹の突起があり、口縁部に直線状4本筋が彫り込まれる。斜面は下げるほど深くなる。	5YR5/6(明赤褐色) 黒母・石英・長石を含む	良好	
11		縄文土器	深鉢	(25.0) (11.8)	10	口縁部に把手あり。口縁部にLR繩文。以下は底及び横の範囲磨擦で埋めまる。	10YR6/6(明黄褐色) 石英・長石を多く含む	良好	底部なし
12		縄文土器	深鉢	(12.1) (8.3)	10	垂下する沈線文様。	5YR4/6(赤褐色) 石英・長石を多く含む	良好	底部のみ
13		縄文土器	深鉢	(45.6) (13.4)	5	表面に横4本筋。口縁部に斜線状4本筋。斜面は下げる。斜面は下げる。	5YR3/6B(暗赤褐色) 黒母・石英・長石を多く含む	良好	底部なし
14		縄文土器	浅鉢	—	破片	口縁部に太沈線とRL繩文を施す。	5YR5/6(明赤褐色) 白い砂粒多く含む	良好	
15	3号住	縄文土器	深鉢	—	破片	ヘラ状工具による沈線文様	5YR4/6(赤褐色) 黒母・石英・長石を多く含む	良好	
16		縄文土器	深鉢	—	破片	結節及びRL繩文	7.5YR5/6(明褐色) 黒母・石英	良好	
17		土器	碗	11.4 5.9 5.7	100	内面…ロクロナデ縁ヘラミガキ(放射状紋外面…ロクロナデ	7.5YR6/6(褐色) 黒母・長石を含む	良好	内面部分的に黒色処理
18		土器	碗	12.5 6.9	100	内面…ロクロナデ外面…ロクロナデ	7.5YR6/6(褐色) 長石を含む	良好	
19	1号上坑	灰陶陶器	碗	11.9 6.9 3.9	100	内面…ロクロナデ外面…ロクロナデ	7.5Y7/2(灰白色) 白色の砂粒を含む	良好	内面重ね焼きによる台部が付着。
20		灰陶陶器	皿	12.8 6.4 2.4	100	内面…ロクロナデ外面…ロクロナデ	10Y8/2(灰白色) 白い砂粒を含む	良好	雜葉漬け掛け。
21		灰陶陶器	碗	13.1 4.0	100	内面…ロクロナデ外面…ロクロナデ	10Y7/1(灰白色) 白色の砂粒を含む	良好	雜葉漬け掛け。

第3表 出土土製品観察表

番号	遺構名	器種	法量(cm・g)				色調	胎土	焼成	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ				
1	2号住	耳栓	1.4	1.9	1.4	5	7.5YR5/8(明褐色)	白い砂粒を含む	良好	

第4表 出土石器観察表

番号	遺構名	器種	材質	法量(cm・g)				備考
				長さ	厚さ	幅	重さ	
1	1号住	石 砧	黒曜石	(2.2)	0.6	1.7	(2.3)	平基無茎頭部欠損
2	2号住	石 砧	黒曜石	2.0	0.3	1.2	0.4	凸基無茎
3		石 砧	黒曜石	(1.9)	0.4	(0.9)	(0.4)	基部欠損
4		剥片石器	黒曜石	(2.8)	1.0	2.3	5.5	石鐵製作過程中?
5		スクレーパー	チャート	(3.7)	1.0	(3.0)	(5.8)	先端・脚部欠損
6		石 砧	黒曜石	5.7	1.5	1.6	7.5	先端欠損
7		横刃型石器	頁 岩	13.0	0.8	3.4	25	側縁に細かな剥離痕(使用痕?有り)
8		横刃型石器	角閃岩	7.5	2.1	8.4	165	側縁に打痕による摩滅有り
9		磨製石斧	輝緑岩灰岩	11.0	2.5	4.2	211	頂部に敲打による摩滅有り(隕石として二次的使用か?)
10	3号住	打製石斧	輝緑岩灰岩	12.0	2.0	4.4	136	刃部に敲打による摩滅有り
11	遺構外	打製石斧	角閃岩	(8.3)	1.1	(3.6)	(47)	
12		打製石斧	泥 岩	(9.1)	2.1	(4.1)	(84)	
13		横刃型石器	砂 岩	(9.8)	2.1	(5.1)	(87)	

第4章 総 括

今回の発掘調査は、高大な範囲に及ぶ遺跡の一部ということもあり、遺跡全域の様相を明らかにできなかったが、遺跡の性格の一端を知ることができたことは大きな成果であったと言える。ここでは、検出した遺構と出土遺物について、若干の所見を付け加え総括したい。

検出した3軒の堅穴住居址は、出土した土器の様相からすべて縄文時代中期初頭に位置付けられる。住居址は、それぞれ形状や大きさに違いが見られるものの、南西に緩やかに傾斜する地形に対してほぼ一定間隔で配置され、土器の形式的な違いがほとんど認められることから、同一時期に形成された集落と捉えることができよう。特出する点としては、最も規模の小さい2号堅穴住居址から、良好な一括土器資料が出土している。中でも8の土器は、4単位からなる大きな波状口縁で唯一キャリバー型を呈するもので、砂粒が多く含む胎土、垂下するY字隆帯文による4単位に区画される文様構成など、他の土器との特徴に違いが見られ、場所の特定はできないが他地域からの搬入品と思われる。また13は、口縁部に抽象化された顔面装飾を有するのもとしては、周辺地域を含めて最古級の出土例と思われる。

次に、平安時代の遺構としては、住居址の検出はなく1号土坑のみであった。これまで実施した調査において、数多くの土坑を検出したが、そのほとんどが用途や性格が不明なものばかりであったが、1号土坑の規模や形状の特徴から、土師器や灰釉陶器の食膳具を伴う土坑墓であると認定し、町内では初めてとなる。9世紀から11世紀にかけて県内では多くの検出例があるが、近隣地域では、本址と同様の食膳具を伴う土坑墓が、南箕輪村神子柴遺跡で確認されている。また、町内における同時期の墓址としては、大出中道遺跡のM・2号土坑（火葬墓）や、南小河内知久沢で須恵器の横瓶を用いた火葬骨壺が検出している。土坑墓は、そのほとんどが木棺墓であると考えられるが、本址からは棺の痕跡を示す木片や釘等は一切出土していないため断定することはできない。しかし、食膳具が整然と並んだ状態で覆土中より出土したとは、遺骸とともに埋納されたものではなく、葬送の儀式に用いられた後に木製の箱または凡に入れられ、棺の上に置かれて埋められたためであると想定すれば、本址も木棺墓であった可能性は否定できない。

本書の末筆にあたり、調査の成果が郷土の歴史と文化の解明する上で有意義に活用され、より多くの人に文化財保護にご理解いただければ幸である。調査の進行と本書の作成にあたり、ご支援ご協力をいただいた株式会社荻原製作所並びに株式会社トキワ電機を始め、地元木下一の宮の方々、そして調査関係者の方々に厚く御礼申し上げる。

参考・引用文献

- 木下区誌刊行会 1995 『木下区誌』
- 桐原 健 1976 「信濃における平安時代土墳墓の性格」 信濃28-1 信濃史学会
- 小平 和夫 1987 「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相—伊那谷における土器様相—」 長野県考古学会誌55.56 長野県考古学会
- 鳥居 龍藏 1926 『先史及原始時代の上伊那』
- 長野県教育委員会 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
—上伊那郡箕輪町一』
- 長野県教育委員会 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3』 吉田川西遺跡
- 長野県教育委員会 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』
—松本市内その1—総論
- 原 明芳 1996 『信濃の古代墳墓』 長野県考古学会誌86 長野県考古学会
- 原 明芳 2003 『灰釉陶器考—松本平の平安時代食膳具様式の関連で—』 長野県考古
学会誌103・104 長野県考古学会
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』 考古資料編 全1巻(3) 遺構・遺物
- 箕輪町教育委員会他 1974 『木下並木下遺跡』
- 箕輪町教育委員会 1980 『中曾根北遺跡』
- 箕輪町教育委員会 1989 『堂地・中道遺跡』
- 箕輪町教育委員会 1993 『大垣外遺跡』 第2次
- 箕輪町教育委員会 1997 『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1976 『箕輪町誌』 第1巻 自然・現代編
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1986 『箕輪町誌』 第2巻 歴史編
- 南箕輪村教育委員会 1969 『神子柴遺跡緊急発掘調査報告書(第3次発掘調査)』
- 山本 典幸 1988 『五頭ヶ台式土器様式』 繩文土器大観3 中期II 小学館



調査区全景（上空より）



1号竪穴住居址



2号聚穴住居址



3号聚穴住居址



1号土坑



1号土坑出土状况



3号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑

作業風景



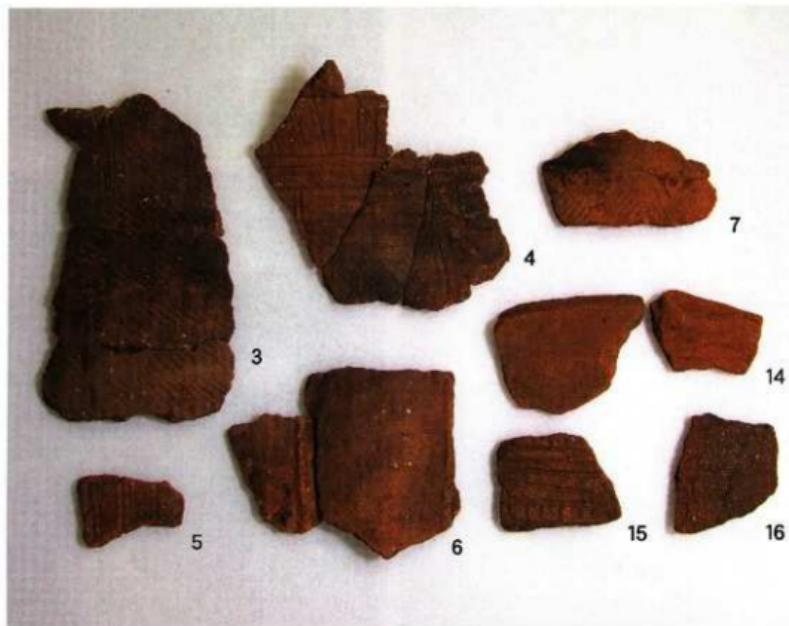
箕輪西小学校 6 年生見学風景



株式会社トキワ電機社員見学風景









1



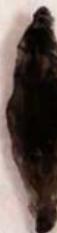
1



2



3



6



4



5



7



9



10



11



8



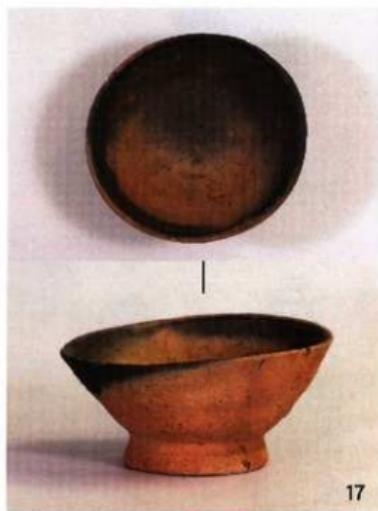
13



12



1号土坑出土土器一括



17



19



20



18



21

報 告 書 抄 錄

一の宮遺跡

平成21年度株式会社トキワ電機施設建設用地
造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成22年3月発行

編集・発行 株式会社荻原製作所
箕輪町教育委員会
印 刷 龍共印刷株式会社
